

## §6-2.

### 今後の課題と展望

本研究では、肌の色という側面から顔の性別認知に迫った。主に性別判断と性別の印象の2つの要素について検討を図ったが、今後の課題としては次のような点を挙げる事ができる。

#### 1) 顔パタンの工夫

本研究の実験においては、男女それぞれの複数の顔を合成した画像を使用した。また、モデルの年齢は20歳前後であり全員大学生であったということにおいても限定が加えられる。更に、日本人の顔、正面顔が用いられたことも本研究を解釈する上で不可欠な情報であるといえる。

これらの限定を外していくことが今後の課題であり、また個々の要因は研究の展開へと繋がる要素ともなり得る。つまり、合成されたものでない顔を用いた場合、コーカソイドやネグロイドの顔を用いた場合、異なる年齢層の顔（例えば若年層、高齢者層等）を用いた場合、横顔が用いられた場合に全く違った傾向が得られる可能性も否定はできないのである。

特に平均顔が用いられたことについては注意が必要であると考えられる。刺激画像には男性の特徴、女性の特徴が残されることになるが、同時に平均顔であるという特殊性が付随することになる。合成顔を用いて得られた結果は飽くまで合成された平均顔に対するものであり、拡大解釈することは避けなくてはならない。このような顔の特殊性を排除するためには、実在の人物の様々な顔パターンについて肌色の作用を確認していく必要がある。また、合成する人数を控えた上で同種の実験を行うことも有用であろう。

更に、肌色を交えた実験においては刺激数を抑えるために顔パタンの数を制限する方法を採った。完全な男性平均顔、女性平均顔を含めた実験を実施し、男性方向、女性方向への顔パタンのバリエーションを拡大した場合の傾向を掴むことによって新たな発見が得られる可能性も考えられる。

## 2) 性別判断／性別印象評定課題の分離

実験 D (第 4 章参照) においては、性別の判断を最初に行なわせ、その後肌色と性別の印象評定を課した。本実験の結果は連続する課題の中で得られたものといえるが、今後は性別判断と性別の印象評定の処理過程を独立で検討する必要もあると思われる。各課題をそれぞれ独立させた上で被験者間計画とし、再実験を行なうことも今後の課題であると捉えている。

また、刺激となる顔を男性として観察させた場合と女性として観察させた場合とで、肌色の明度評定の比較を行なうことも有用であると思われる。

## 3) 対象者要因とのクロス

本研究においては、肌色に対するステレオタイプ的な認識の強さによって対象者間比較を行なった。しかし、性別判断までの反応時間以外には顕著な差異は認められなかった。今後更にステレオタイプ要因の検討を図る場合には、予備調査として対象者を絞り込んだ上で観察者特性をより厳密に設定していくことが課題であるといえる。

また、ジェンダーに対する意識の強さ、考えの在り方が顔からの性別判断に影響してくることも予想される。Bem (1974) の BMSI や、伊藤 (1978) の MHF スケールによって特定の態度を持つ人物を抽出し、その上で判断傾向を確認していくことも重要であると考えられる。

## 4) 脳処理過程との比較

総合考察においては、脳処理過程との比較を通じて本実験結果を概観した。しかし、本稿で示した処理過程は一可能性を持つものに過ぎない。その証明には脳神経科学分野からのアプローチや認知実験の繰り返しによる確認が不可欠である。

脳内の情報処理過程に基づく仮説から出発した実験を行い、常に脳処理過程との比較を意識した認知実験を行なっていくことは、新たな知見をもたらしてくれるものと予想される。

## 5) 印刷物、放映物に対する調査の実施

それまでに視覚経験された情報によって認知傾向が左右されると考えれば、印刷物や放映物における男女の描き分け、表現方法の差異は調査すべき重要なファ

クターとなる。メディアが発する情報そのものに対するアプローチは非常に難しいが、形式化されている表現方法の抽出や情報の受け手側が感じ取っている男女の表現の差異等から現状を掴みとることは有用であると思われる。

## 6) 肌色に対する意識調査の実施

本研究の肌色に関するアンケートにおいては、従来のステレオタイプに沿った傾向が得られた。今回の回答者は大学生の男女に限られたが、対象年齢を拡大した上で調査を実施し、肌色に対する意識の世代変化を捉えることも必要であると思われる。更に、その結果をもとに肌色の明度を変化させた刺激顔を作成し、それぞれの好ましさを確認することも性別認知というテーマを掘り下げる一つの手がかりとなるものと考えられる。

## 7) 尺度間の連関の検討

本研究においては、男女のどちらとして捉えられるかという性別判断、女性度の判断、性別の印象評定等、種々の課題を設けた。しかし、メタセティックなデータとして扱うべきもの、プロセティックに解釈すべきものが混在していると言わざるを得ない。本研究ではそれぞれのデータの特徴を抽出し、両者の違い、関係性を検討する部分もあったが、必ずしも十分であったとはいえない。データの質を吟味し、その特徴を注意深く検討していくことが第一に必要であり、その結果を踏まえた上で種々のデータの関係を探っていくことが適切な展開であると思われる。

上記の点に留意することにより、本研究のテーマである性別認知に関してより深く確かな接近が可能になるものと期待する。また、目的として掲げた諸領域の融合を確実なものとするためには、今後特に社会心理学的、社会学的接近を強めていくことが要されるものと考えられる。性別を判断する、或いは性別の印象を得るといった認知特性の把握に留まらず、その背景に対するデータ採取を同時に行い、それらの結果を多くの分野の視座から読み解いていく。本研究はその試みの段階に留まったというべきかもしれないが、それこそが人間科学的アプローチであり、可能性を多分に秘めた研究手法であると考えられる。